

# Weave

～男女共同参画社会の実現に向けて～

男女共同参画社会の実現に向けては、地域社会の活動の中で、男女がともに責任を分担し合いながら支え合うことが必要です。特に、防犯・防災分野では、男性と女性それぞれの視点を反映していくことが重要であるため、女性の積極的な参画が求められています。

今回は、消防団員として活動されている原山栄子さんにお話を伺いました。

問合せ 企画政策課企画政策担当④ 314



## インタビュー

### 地域を守る女性のチカラ

#### ～地域に密着した消防団活動～

羽村市消防団本部 班長：原山栄子さん

消防団に入団したきっかけは何だったのですか？

平成16年に双葉町松原町内会の町内会長に誘われて、当時行われていた女性防災コンクールに出場したことがきっかけです。その後、消防団に入らないかと声をかけてもらって、やってみたいと思つて入団しました。

消防活動に興味があったのですか？

正直に言うと、興味はありませんでした。女性防災コンクールに誘われたときも、訓練もあるし、順位も決まるし、プレッシャーを感じてしまい気が重かったのが最初は断りました。でも、町内会長と話しているうちに、とらえずやってみようということになったんです。

5人1組のチームで練習を始めたのですが、消防署の方が熱心に教えてくれて、チームが団結していきました。防災訓練には毎年参加していましたが、正しい消火方法や動き方などを学ぶにつれ、練習にも力が入っていききました。大人になってから、何かに真剣に取り組むということがなかったのです。すごく新鮮で、受け身だったものが主体的な気持ちに変わっていった、すべてが楽しくなりました。

コンクールが終わってしばらくしてから消防団の話があり、すぐに入団を決めました。

家族や周りの方からの反応はどうでしたか？

コンクール当時は、まだ小さい子どもがいたので、母に預けて訓練に行きました。子どもたちには「なんで行っちゃうの」って泣かれましたし、夫からも、「なんでそんなことするの?」と言われてました。

訓練は夜で、仕事から帰って、急いで夕食の支度をして出かけるんです。

「行かなきゃいけない!」という使命感があり、苦ではなかったですね。消防団にも入団して、今では家族も「いつてらっしゃい」という感じです。私は一度決めたらがむしゃらに突き進むタイプなので、家族は止めても無駄だと思っているんじゃないかな。

でも、子どもが少し大きくなって、消防士になりたいと言いだした時期があったんです。うれしかったですね。子どもが小さいころ、私の普段の活動の様子などをよく話して聞かせていて、私のまねをしていたんですよ。

